

Title	E・ ハワードと西村伊作：田園都市の誕生と日本における受容をめぐって
Sub Title	The "Garden City" observed from early twenty-century Japan
Author	小野, 修三(Ono, Shuzo)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2009
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. 社会科学 (The Hiyoshi review of the social sciences). No.20 (2009.) ,p.1- 22
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10425830-20100331-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

E・ハワードと西村伊作

——田園都市の誕生と日本における受容をめぐる——

小 野 修 三

1. はじめに

本稿は20世紀初頭のエベニーザー・ハワード、レイモンド・アンウィンらによる町づくり、すなわちロンドンの北34マイルに位置する「最初の田園都市」レッチワース（Letchworth）誕生に係わった人々について論じようとしているが、さらにそうしたイギリスにおける動きが当時の日本人によってどう理解され、受容されたか、その軌跡を追うことも目指している。一般的に思想の受容ということでは、構想のもともと意図がそのものとして理解されるケースと理解されないケースが考えられるので、イギリスと日本との間での思想の〈連続と不連続〉の両局面を瞥見したいと考えているが、田園都市と日本ということでは、後者のケースすなわち別種の事柄を同じ名称田園都市のもとで受容し続け、今日まで至っている側面が多いように思われる。

より具体的に言えば、ハワードやアンウィンらによる改革的傾向を日本で継承したのは、『田園都市』と題した書物を1907年（明治40）に公刊したことで今日でも語られることの多い内務省地方局有志の間においてなのか、また渋沢栄一らによって1918年（大正7）に設立され、1928年（昭和3）まで存続した田園都市株式会社においてなのか。先行研究によれば、田園都市株式会社が「開発したのは、ハワード流の田園都市ではなかった」¹⁾のであり、『田園都市』の編者達は「ついに田園都市論の本質を理解しえずに終わった」²⁾。

1) 渡辺俊一「日本的田園都市論の研究（1）：田園都市株式会社（1918-1928）の場合」、『都市計画』別冊（日本都市計画学会）1977年、Vol. 12、155ページ。

2) 渡辺俊一「日本的田園都市論の研究（2）：内務省地方局有志（編）『田園都市』（明治40年）をめぐる」、『都市計画』別冊1978年、Vol. 13、286-287ページ。

本稿の関心は『田園都市』という出版物、田園都市株式会社という事業体から、さらに『楽しき住家』（1919年）、『田園小住家』（1921年）、『生活を藝術として』（1922年）を公開していた、今日ではむしろ文化学院の創始者として知られる建築家西村伊作（1884～1963）へと伸びる。例えば、『田園小住家』の序文は「この書は田園都市に建つ可き小さな住家の設計略図と其の説明を集めたもの」³⁾と書き出されている。

わが国において田園都市に関する研究は今日まで相当の蓄積があり⁴⁾、それらに依拠して検討を加えるつもりであるが、本稿では最初に〈構想のもともとの意図〉に関して社会改良家ハワードと建築家アンウィンたちについて紹介し、次に彼らとの比較においてわが国の受容者たちを論じたいと思う。

2. 改革思想家たちの出会い

エベニーザ・ハワード（Ebenezer Howard）は1850年ロンドンに生まれ、20代にアメリカで5年ほど働き、帰国後に速記者の仕事に従事していたが、彼の名を知らしめたのは1898年に出版した“*Tomorrow-a Peaceful Path to Real Reform*”であり、同書を改訂して1902年に出版した“*Garden City of Tomorrow*”であった。本稿では既に邦訳⁵⁾も出ている『明日の田園都市』ではなくて、1905年に田園都市出版社から刊行されたG・モンタギュー・ハリス著『田園都市運動』にハワードが寄せた序文を通して、彼の思想つまり〈構想のもともとの意図〉を窺ってみよう。『明日の田園都市』が出版された1902年は、「最初の田園都市」レッチワースが誕生する前だったが、ハリスの著書が出版された時点では「最初の田園都市」レッチワースの建設が既に始まっていた。その序文をハワードはこう書き出す。すなわち、

3) 西村伊作『田園小住家』（警醒社書店、1921年）序1ページ。

4) 坂弘二はその「何がために都市計画はある——E・ハワードの町づくり」、『地方自治』第335-第341号（1975年10月-1976年4月）において、私が言う意味と同じハワードの〈構想のもともとの意図〉を、本稿より何倍も丁寧に追っておられる。これと対照的に、その〈構想のもともとの意図〉がハワードの同時代において歪められてゆくプロセスを追っているのが東秀紀『漱石の倫敦、ハワードのロンドン』（中公新書、1991年）である。なお、今回参照出来なかった先行研究に西山八重子『イギリス田園都市の社会学』（ミネルヴァ書房、2002年）がある。

5) 長素連訳『明日の田園都市』（鹿島出版会、1968年）。

私が数年前に実現すべく世に問うた一つの思想——それは新しく美しくてスラムのない都市を国民への実物教育として建設しようというものでしたが、この都市建設はその前に横たわる、そしてそれよりずっと大きな作業たる真理、正義および平和の土台の上にその外枠を組み立て直す作業のための準備だったのであり、共に労を取って下さった多くの男女の皆様に対して私の胸に溢れる感謝の言葉をこの序文に盛り込むことが出来るのなら、何という喜びを私はこの言葉を発しつつ感じたら良いのでしょうか。しかし、感謝の気持ちを余すところなく表わすことが出来るというこの喜びは、決して私一人のものではありえません。というのは、田園都市運動が広がるにつれて——さらなる助力が自由にわれわれの主張に対して示されるにつれて——私を満たしている喜びと感謝の気持ちはますます深まるのですし、これを言葉にすることはますます為し難くなるのですから。

真の思想は種子です。その創造的な力は長く眠ったままのこともあります、常に生きており、それが播かれる土——それが生まれる環境——が準備されさえすれば、直ちに芽吹くものです。そして自由や正義と歩みを共にしながら運営される、新しい用地に立つ新しい都市という概念は、それ自体紛れもなく実践可能であると私は、最初の段階から、確信しました。つまり、この概念は想像力をかき立て、熱心さを燃え上がらせ、忍耐強く持続的な努力を高めるべく用意されており、またすべての傾向の思想と感情の持ち主たる人々が一つになることが出来る意義深く幅広い目的を提示する、時代の欲求であることが事前に明らかであり、また愛らしさと光り、美しさと健康、平和と正義を育むもろもろの力を束ねることは出来るのであって、その結果、その思想に十分な「生命の開始」を与える私自身の能力不足があるかも知れないという予感が時として起こるような場合を除き、私はその初期の段階での実現に疑念を抱くことは一度もありませんでした。

しかしこの疑念はすぐに消失しました。その思想は最大級の目覚しき生命力を保持していたのです。(後略)⁶⁾

このハワードの言葉から、彼が目指す「新しく美しくてスラムのない都市」、「新しい用地に立つ新しい都市」の建設運動、つまり田園都市とは「真理、正義および平

6) G. Montagu Harris, M. A. “*The Garden City Movement, with a Preface by Ebenezer Howard*”, Garden City Press Limited, 1905, pp. 5-6.

和」の実現を、多くの人々の協力のもとに、目指す思想運動という志向性のなかで理解されるべきものであったことを私たちは知ることが出来る。では、この思想運動とは何を意味したのか。この点で「〈世界の工場〉から〈大英帝国〉へとイギリスが最も輝かしい繁栄を享受した時代」⁷⁾たる1937年から1901年まで在位したビクトリア女王の統治期に関して、論集『ビクトリア期の思想家』(1993年)の編者キース・トーマスが記す次の言葉を引用しよう。すなわち、

ビクトリア期とは道徳的価値と宗教的価値が堅固であった時代、物質的進歩が充足の精神を生んだ時代であると、自己満足だとしても、しばしば見做されている。しかし本書でその思想が再評価される4人のビクトリア期の人物(カーライル、ラスキン、アーノルド、モリス)のうち誰も正統的なキリスト者ではなく、彼ら全員が時代の支配的価値に公然と反抗した。彼らは彼らが生活する産業文明をその社会的不正義、その美的粗雑さ、そしてその道徳的、文化的無内容の点で糾弾したのである。改革のための彼らの処方箋は別々であったけれども、人々の生活は19世紀イギリスの現状が許容する以上に幸福であるべきであり、一層の価値があり一層の充足があるべきであると信ずることにおいて彼らは共通していた。⁸⁾

発展する資本主義が生み出す貧困は、その貧困に現に苦しむ個々の労働者の責任に帰すことの出来ない構造的な問題なのであるから、構造的な対応が必要であるという認識、つまり社会問題への社会的対応策として社会主義、社会政策が生まれて来たという認識は今日のわれわれには常識に属する事柄であるが、「物質的進歩が充足の精神を生んだ時代」たる19世紀ビクトリア期において、「社会的不正義」を生む産業文明に異議を唱え、改革を目指す人々は「時代の支配的価値」つまり常識からは離れていた少数派であった。その少数派に属する人たちからの影響のもとで育った改革思想の持ち主に、1850年生まれのエベニーザー・ハワードがおり、そしてその彼が「新しい用地に立つ新しい都市」の設計図を1903年に公募した際に、それに応募し、結果的に採用される案を提示した1863年生まれの実業家レイモンド・アンウィン(Raymond Unwin)とその義弟で1867年生まれの実業家バリー・パーカー(Barry Parker)がいた。

7) 松浦高嶺「ビクトリア(女王)」、『国民百科事典』11, 平凡社, 1978年, 332ページ。

8) Foreword by Keith Thomas, "Victorian Thinkers", Oxford University Press, 1993, p.v.

これら3人の出会いを、『イングランドの近代的カントリー・ホーム』（1986年）の編者ディーン・ホークスの言葉で紹介したい。すなわち、1896年から1914年までアンウィンとパーカーは建築事務所を共同経営し、その共同経営が始まった当初の出来事として、

実務は多くの人たちがそうであるように、家族や友人たちからの依頼から始まり、直ぐに繁盛した。兩人とも労働者階級の人々の住宅の質の向上を依頼され、産業都市の現状に関する直接的な経験が彼らに与えた影響が大きかったようである。彼らは社会主義の運動に積極的に係わり、フェビアン協会の初期の会員であった。彼らの場合、ウィリアムス・モリスの思想に傾倒するに至るであろうことはほとんど不可避だったのであり、2人のうちで紛れもなく政治的な傾向がより強い人物であるように見えるアンウィンは産業都市の間を、「労働教会」の支部の人々に「ウィリアム・モリスの生活と業績」といったような主題で演説して回った。

こうしたことのすべてが、モリスの見方が彼らの作業のなかに現れる傾向を予め作り出し、1901年に彼らは一連の講義と論文を集めて、“*The Art of Building a Home*”とのタイトルを付けた。これらの諸篇のうちのいくつかのタイトルは、彼らの思考の根源がアーツ・アンド・クラフツにあることを示している。パーカーは「すべての真の芸術の尊厳について」を書き、アンウィンは「芸術と単純性について」を書いた。彼らの関心の社会的次元はその他のタイトル、すなわち「一段と小規模な中産階級の家屋について」や「建築における共同作業について」に現れている。

これらのテーマは彼ら自身のデザインによって図示され、そして出版年中に第2版まで至った同書は、新しい顧客の注目を彼らにもたらした。1902年にはクエーカー教徒のチョコレート製造業の一族であるジョセフおよびシーボム・ローン・トゥリーがパーカーとアンウィンをヨーク近郊ニュー・イヤーズウィック(New Earswick)のモデル村にための建築家に指名した。ここに彼らは自分たちのアイデアの大規模表現が可能となり、そしてこの経験によって、その翌年実施される、エベニーザー・ハワードの直接のインスピレーションのもとでのハーフォードシャーのレッチワースにおける「最初の田園都市」の設計のための制限付き競争で

成功を収めることが可能となった。⁹⁾

この説明からもわかるように“*The Art of Building a Home*”を1901年に出版した時点では、アンウィンたちとハワードとの間には建築家と顧客・依頼主といった直接的な関係はなかったわけである。そのような関係は、より正確に言えば競争相手を伴って、翌々年の1903年になって初めて生まれるということであり、またハワードの著書“*Garden City of Tomorrow*”は1902年の出版なので、同書中でもまだアンウィンたちとハワードとの間には建築家と顧客・依頼主といった関係は存在しないのだから、レッチワースに関する設計図は勿論同書中には掲載されていない。

ところで“*The Art of Building a Home*”のなかに建築家と依頼主の間の仮定の話として語られる一節がある。依頼主からの注文の内容を話題にしているが、建築家の側からの声が最後に示されている。すなわち、

例えば、ある建築家が何軒かの労働者のコテージの建築依頼を受ける。価格が第一番目の契約条件である。これは労働者たちが彼らの現在の賃金のなかから支払うことが出来るような家賃で賃貸される時に、そのコテージが適正な収益を生む限度において十分に安価でなければならない。おそらく次の契約条件は、それぞれの家には客間、台所、それに3部屋の寝室がなければならない、ということだろう。こうした指示の通常の帰結は、同じようなコテージが並び、それぞれ前面に小さな客間とそこに入るための正面玄関があり、そして背面には台所という設計である。(中略) 台所には裏庭に通じるドア、ただ1か所開いた窓の下に流し、そしてその流しと調理用火口の間に洗濯用の銅製大釜が置かれている。ここが家族にとって居間として使われる12×15フィート四方の場所であり、ドアが3か所、流し、そして銅製大釜がある。確かに客間はあるが、ほとんど使われない。居住者たちには二つ目の火口用の石炭を工面する金銭もなく、火を燃やし続ける精力もなく、その部屋は使うには小さ過ぎるし、家族全員が家にいる短い時間のなかで家族が分かれて過ごす傾向もないだろう。しかし、世間体という誤った伝統的慣習はこの客間を要求し、価格の厳しい限界は食器部屋や洗濯部屋を追加する可

9) Dean Hawkes, “*Modern Country Homes in England: The Arts and Crafts Architecture of Barry Parker*”, Cambridge University Press, 1986, pp. 6-7.

能性を予め排除している。

建築家はこうしたらもう一つ別の観点からこの客間が必要だとの依頼を封ずることが出来るようにと願うことが可能か。彼はこうしたら居住する人々の生活習慣に適合した家を設計することが出来るようにと願うことが可能か。¹⁰⁾

具体的な設計の変更内容は当面扱う必要はないだろう。本稿では建築家たちが「世間体という誤った伝統的慣習」を排除し、「居住する人々の生活習慣に適合した家」の設計を目指していたことを知ることが重要であろう。言い換えれば、客間ではなく居間を中心とした住宅の設計思想の提案である。こうしてアンウィンとパーカーはその“*The Art of Building a Home*”において、居住する人々の「生活」を中心に家を設計するという「もう一つ別の観点」に立った。その場で生活する人々のことを考える時、建築家の視線は単体としての家屋だけではなく、複数の家屋を束ねて、グループとして考える方向、町づくりに関する提案を行なう方向にも向かった。すなわち、

すべての大きな町には、自分たちがそこで生きることを強いられているその生活のおぞましさ、つまらなさを嫌悪する多くの人たちがいるが、彼らは田舎と田舎生活を愛する人たちであり、職場との間を往復する長距離旅行をして楽しむことが出来る人たちなのである。これらの人たちは孤立した家屋に住みたいとは思わず、隣人たちの姿が目に入らないことを望まない。彼らは社会を好む本能 (sociable instinct) を持つ町の人々なのであって、町の周辺部の外側に広がるあたりに住むことは望まない。彼らが本当に望むのはカントリー・ヴィレッジ、すなわち人々にとっての関心事たる人間社会をもたらし、近代生活にとって一層必要な数種の快適さをもたらし、それだけの規模と多様さを兼ね備えた生活の小さな中心点 (little centres of life)、例えば郵便局、鉄道の駅、効率的な排水設備や水道水の供給があるところなのである。これらの人々には共通の関心がある。すなわち、新たに入居したなら皆が保存したいと願う多くのもの、例えば新鮮な空気と簡単に損なわれることなどあり得ぬ田舎の広々とした眺めである。こうした彼ら全員にとっての利点を生かす一定の行為が連動して起こりさえすれば、それ

10) “*The Art of Building a Home: A Collection of Lectures and Illustrations by Barry Parker and Raymond Unwin*”, Longmans, Green & Co., 2nd Edition, 1901, pp. 63-64.

で入植地全体に一体感を与えるには十分であり、こうした一体感は各人が自分一人だけでいくら懸命に奮闘して保とうとしても効果は上がらず、まったく嘆かわしくも欠乏するものなのである。何らかの共同作業によってこれらの利点は、個々の家屋の大小に係わらず、すべての家屋にとって最大限に保持され得るはずである。それなくしては広大な田舎の土地を自分一人のためだけに購入することが出来る金持ちが、それも限られた範囲において安心できるだけである。¹¹⁾

アンウィンとパーカーはこのように「社会を好む本能を持つ」人たちを前提にして、人々が共に生活する環境のなかでの美の追求についても語っている。すなわち、

間隔を開けて家を建てたいと皆が共通に強く願う気持ちは大いに注目すべき事柄である。その気持ちは主として安普請の仕切り壁を不可避なものと諦めて受け入れることから起こっているようだ。誰もが仕切り壁を疑い、それを通して真夜中には隣人の子供の泣き声、日曜日の午後には隣人のピアノの音を聞きながらその壁を眺めている。防音の仕切り壁を請け負うようにせよ、そうすれば2軒ごとの間隔として10から50フィートの不要の空地があってしかるべきだと正当な根拠を挙げて主張する人は誰もいないだろう。正しく建築された家屋においては、われわれはその隣人のことは実際はるかに気にはならないものであり、もし隣家が密着していたとしても、数ヤード離れている場合よりも、隣人が気にすることはずっと少ないはずである（中略）。

芸術的には、計画の成功は主として建物を束ねること、一方では単なる家並を避け、他方では離ればなれのヴィラを避けることに掛っている。しかし、これに加え、ある種の統制的影響を及ぼして一定程度の調和を維持する必要がある。地元の材料を出来るだけ多く使用することが奨励されるべきであり、また不協和な色彩や建築形式の導入は防ぐべきである。¹²⁾

マーク・スヴェナートン著『職人と建築家』（1989年）によれば、アンウィンが1901年の“*The Art of Building a Home*”およびその後数年間の出版物によって世に示した

11) *Ibid.*, p. 96.

12) *Ibid.*, p. 99.

「住宅と都市計画に関する思想」は「建築と都市との関係の転換点をなすと見做されるに至っており、その影響は英国だけではなく全世界に大きく及んでいる」¹³⁾、と。

「最初の田園都市」レッチワースの歴史を現在最も詳細に研究している歴史家メルヴィン・ミラーはその『レッチワース田園都市』（2005年）のなかでこう記している。すなわち、「1903年10月に制限付きの競争が当座の取り決めのもとで行なわれ、W・R・レサビーとホルセイ・リカルドとが、バリー・パーカーとレイモンド・アンウィンとが、そして〔地元〕ヒッチンの建築家ジェフリー・ルーカスがシドニー・クランフィールドと共に申し込みを行なった」。そして「評価の結果（中略）パーカーとアンウィンの計画が、1904年2月28日に暫定的に承認され、2月11日付の『会社の計画』として確認された」¹⁴⁾、と。

本稿では、これまでディーン・ホークスに従って、アンウィンとパーカーが1902年ヨーク近郊ニュー・アースウィックのモデル村のための建築家として指名された経験が、その翌年1903年実施の、レッチワースにおける「最初の田園都市」の設計のための制限付き競争を征することを可能にしたと紹介してきたが、メルヴィン・ミラーによれば、「アンウィンは1901年ボーンヴィルで〔田園都市協会第一回総会の際に〕ハワードに会ったことがあり、レッチワース設計のための委託金を入手することに決め、6週間現地に滞在し、自分の計画に調和的に組み入れるべく、現地の自然ならびに風景のもろもろの特徴を精査した」¹⁵⁾とある。私の憶測が許されれば、多分こうした委託金はメルヴィン・ミラーが言及する別の2組の応募者に対しても、アンウィンたちに対してと同様に与えられていたのではないか。そしてそれは3組だけに絞られたので、この競争が「制限付き」と呼ばれていたのではないか。したがって、この委託金を手にしたことによってアンウィンらが特別に有利になったとは断言出来ないものであり、ディーン・ホークスの主張はそれ自体退けられるべきものではないと考えられる。

本稿では次に建築家のアンウィン、パーカーに対して、顧客・依頼主たるハワードが抱いていた田園都市構想の特徴を簡単に紹介し、依頼主と建築家との合作がどう実現されていたかを瞥見してみたいと思う。

13) Mark Swenarton, *Artisans and Architects: The Ruskinian Tradition in Architectural Thought*, Macmillan Press, 1989, p. 129.

14) Mervyn Miller, *Letchworth Garden City*, Nonsuch Publishing Limited, new pocket edition, 2005, p. 8.

15) *Ibid.*, pp. 8-9.

3. 「最初の田園都市」の誕生

再びG・モンタギュー・ハリス著『田園都市運動』（1905年）によって、世紀の転換期の都市をめぐる状況を紹介してみよう。ハリスはこう語っていた。すなわち、

最近数年間で悪しき住宅建設の弊害の減少が大いに進んだことは本当である。1891年から1901年の10年間でイングランドとウェールズにおける一部屋だけの安アパートの数は92,259軒から66,669軒に減少し、「過密な安アパート」の住人の数は3,258,044人から2,667,506人へと減少した。大量の資金がロンドンおよび他の大都市によって非衛生地域の一掃と労働者階級の住宅建設に費やされてきた。こうしたすべて努力の効果は、だが、その費用と釣り合うものではない。（中略）『住宅建設便覧』から引用すると、「道路管理、入念な構造的衛生施策および強制移住にも係わらず、ロンドンのモデル居住地区における死亡率はしばしばサリー州の隣接郡に居住の全階級の平均値より30パーセントも高いということ、また一方で肺結核、猩紅熱およびジフテリアによる死亡者数ではこれまでしばしばこれらのモデル地区の方がロンドンのスラム街の平均値より高かったということ、また過密な部屋と古い全家屋の場合も同じだということは、重要な事実である。」¹⁶⁾

こうした費用対効果の比率の悪い従来の施策に対して、ハワードが今提案している「労働者階級の住宅建設」はどんな内容だったのか。ハリスの説明はこうである。すなわち、

財産と生活を楽しむ機会とにおいて全員が平等な、そうした理想的な社会主義国家を目指すのではなく、事柄の可能な限度内で、現状とは本質的に違う何かが明らかに求められている。賃金労働者ならば、最小限、自分の背丈以上の高さの天井だけではなくて、自分自身と自分の家族にふさわしい住宅を要求出来て然るべきなのである。その住宅が備える条件とは、すべての同居者に十分な光と空気を提供するようなものであるべきである。住宅は彼の職場から、また商店、クラブ

16) Harris, *op.cit.*, pp. 16-18.

そしてレクリエーション施設から楽に通える範囲にあるべきであり、そのことで皆が共に憩える社会が保証されるはずである。学校と礼拝の場所とは、近くに位置すべきである。彼は自分自身の庭を持つべきであり、そのことで健康的な労働に従事することと収入の足しになることが同時に実現されるはずである。彼の環境はあらゆる観点から健康的であるのみならず、そこには自然と芸術の両方の領域における美的なるものが入り込むはずである。自然は、実際、彼の近くに、そしてとりわけ彼の子供たちの近くに持ち込まれるべきであり、同時に都会の人々の存在と両立するものである。

簡単に表現すれば、求められているのは、町なかと田舎の有利さを結び合わせることであり、他方それぞれの不利さを回避することである。このことがエベニーザー・ハワード氏によってその著“*Tomorrow*”のなかで提案されたことであり、同著は田園都市運動のゲネシスであって、この運動が発展し、実現へと導く原理全体を含んでいる。¹⁷⁾

さらにもう一点ハワードの田園都市の特徴を指摘しておこう。すなわち、そこでは

実際に建築されないままに残る帯状の土地によって常にその周囲が取り巻かれることになる。この帯状の土地の大部分は、小規模保持者たちに対して賃貸しにされるべきものであるが、彼らは自宅近くに市場があつて、その製品の販売にとって抜群の好条件に恵まれ、それと同時に市街地での生活の有利さとあらゆる便利さを享受することになる。¹⁸⁾

これらの箇所を読めば、「町なかと田舎の有利さを結び合わせる」ハワードの計画には賃金労働者の「環境はあらゆる観点から健康的であるのみならず、そこには自然と芸術の両方の領域における美的なるものが入り込む」とするところに見て取れる、ウィリアム・モリスの思想を受け継ぐアンウィン、パーカーの設計からの影響という側面と共に、C・B・パーダムがその著『レッチワースが成し遂げたこと』（1963年）のな

17) *Ibid.*, pp. 19-20.

18) *Ibid.*, pp. 31-32.

かで、「社会主義者にあらずして社会主義的であった」¹⁹⁾と表現したハワードの社会改良的傾向、すなわち賃金労働者にとってその「住宅は彼の職場から、また商店、クラブから、そしてレクリエーション施設から楽に通える範囲にある」という職住接近、つまり当該都市のなかで労働者の労働と衣食住のすべてが完結するユートピア計画²⁰⁾の側面を見て取ることが出来るはずである。ロバート・オウエンのニュー・ラナーク(New Lanark)と比較され得るこの「田園都市運動」は、勿論、そのための用地が買収されて初めて可能になるものであり、この土地の買収を担当した「最初の田園都市」会社(First Garden City Ltd.)に関するハリスの説明をさらに聞こう。すなわち、

この会社は1903年に田園都市鉄道の用地の購入と開発のために結成されたもので、30万ポンドの額面資本をもって出発した。この総額のうち約11万ポンドは約1340名の株主、役員ら自身によって払い込まれ、彼らの関係で約4万5千ポンドを工面した。株主への配当は年5パーセントの累積配当に制限され、これを超過するいかなる利潤もコミュニティーの利益のために用地へと投入されるべきものとされた(中略)。

調達された資本の総額では計画の完全実行には不十分であることは明白であり、そして必要な土地全体の購入は一時的な抵当によって負担することなくしては不可能であることがわかった。これは不可避のことであった、というのは計画の本質は組織団体が対象とする土地全体を最初から所有しているところにあったからである。もしそういう状態になっていなかったならば、不労所得の増加分を入手する有利さはまったく失われてしまうわけである。したがって、最初の10万ポンドを比較的容易に獲得した役員会は、全資本総額の調達を待たずして、田園都市開拓者株式会社によって推薦された土地全体を多くの異なった所有者たちから購入したのであった。²¹⁾

この説明からわかることは、第一に、「最初の田園都市」会社の株主は、株主が通常

19) C. B. Purdom, “*The Letchworth Achievement*”, Dent, 1963, pp. 1-2. なお同書の翻訳として『計画評論』(都市計画協会) No. 14, 1977年に長素連訳「レッチワース」がある。

20) 田端康雄「ユートピア計画」, 『国民百科事典』14, 58ページ。

21) Harris, *op.cit.*, pp. 46-48.

求め得る配当を一定限度以上は放棄すること、かつその放棄分が会社の経営（さらなる用地の買収）のために使用されることを承諾することが求められている点で、資本主義的側面と非資本主義的側面の両方を兼ね備えた「計画」を志向する株主として性格付けられていたのである。資本主義に立脚する株主たちが何故に「計画」に同意出来るのか。

それは前節で紹介したところの、『ビクトリア期の思想家』（1993年）の編者キース・トーマスが記す産業文明の「社会的不正義、その美的粗雑さ、そしてその道徳的、文化的無内容」を目の前にして、ハリスの著書『田園都市運動』への序文のなかで語られた「新しくて美しくてスラムのない都市を国民への実物教育として建設しようとする思想、そして都市について「真理、正義および平和の土台の上にその外枠を組み立て直す作業」を目指すハワードに対して、その思想に共鳴するが故に、人々は「計画」を推進する「最初の田園都市」会社の株主となったということである。

まさしく田園都市は思想を実現する運動だったのである。人々は思想家として資本主義のメカニズムのなかでの「計画」の推進に同意を与えたのである。したがって、これはあくまでも株主という意味の主体たる私人の存在が前提であって、私人が消えて、「最初の田園都市」会社が国有化され、国家政策として田園都市が計画化されれば、また他方その私人が資本主義的側面のみを主張し、「計画」を承認しなければ、ハワードの思想はその瞬間に消滅することは言うまでもない。

そして第二に指摘されるべき点は、この「最初の田園都市」会社は、少なくともハリスの著書が出版された1905年の段階では、その目的を達成するに十分な株主を集めることが出来なかったことである。C・B・パーダム著『レッチワースが成し遂げたこと』（1963年）によれば、1935年に全資本の払い込みが完了した（p. 34）とあり、そして前記の引用中には記されていないが、ハリスはその著書出版当時、既にハワード自身の意向とハワードが設立した田園都市協会のそれとが乖離を起こしていたと記している（p. 42）。「その初期の段階での実現に疑念を抱くことは一度もありませんでした」とハワード自身は力説していたが、彼の周囲では疑念が充満していた、ということだろう。播いた種子が芽吹いても、必ずしもすくすくと成長するとは限らないわけである。1914年にはアンウィンがパーカーを残して、ハムステッド（Hampstead）での田園郊外（garden suburb）計画に移ったこと、1919年に「第二番目の田園都市」がウェリン（Welwyn）に誕生したことなども含め、その後の田園都市についてはC・

B・パーダムの著書が詳しいので、そちらを参照頂きたい²²⁾。

4. 建築家西村伊作

その娘から「何しろ職業についていない父ですから二十四時間専業父親です」²³⁾と語られた西村伊作である。つまり、普通の父親なら糊口の途を得る必要があるので自分の全時間を自分の子供の教育に割くことは不可能であるのに対して、彼はその母方の祖母西村もんが残した財産によって、自分の全時間を教育であれば、教育に振り向けることの出来る〈余裕のある〉人であった。そうした境遇が彼を文化学院の創設者たらしめたと言えるし、また他の分野でも彼に〈余裕のある〉行動をとらしめたことを背景にして初めて理解出来る側面が多いように思われる²⁴⁾。

『我に益あり・西村伊作自伝』（1960年）のなかで、陶器を焼くことの次に、本を作ることをやり出したという箇所がある。すなわち、

私は自分の家を建てるために建築の本をたくさん読んだから、建築のうちでもことに住宅のことに興味を持って、日本人が生活を改善して幸福な家に住むために、世界的に新しい家を作ることを日本人に教えねばならぬと思った。日本の住宅は世界のどの国の住宅とも違っていて、世界的の生活をするのには都合が悪い。どうしても世界的な生活を日本人がしなければならないだろうと私は思った。それで家を改良し、そして欧米人の住んでいるような家に日本人が住むことが必要だと思った。それで私は住宅の作り方、設計のしかた、の本を書いた。それを『楽しき住家』という題にして出版した。住宅建築の本はその時分少なかったから、新聞等で紹介されてよく売れた。それは1920年（大正9）ごろであった。²⁵⁾

22) 現在のレッチワースに関しては、宮崎洋司、阿多真人「E・ハワードの英国田園都市にあらためて学ぶこと」、『住宅』49巻12号、2000年12月、74ページに「現状は人口は32,067人（1999年）で計画ピッタリである」と報告されている。「提案された都市は（中略）人口を32千人以下に留め」（同）るものだったからである。またMichael Hebbert, To-morrow never came-or did it? “*Town and Country Planning*”, No. 67, October 1998, pp. 17-19も参照。

23) 上坂冬子『愛と反逆の娘たち——西村伊作の独創教育』（中公文庫、1983年）75ページ。

24) 彼の父親大石与平の弟大石誠之助が、明治43年の大逆事件で検挙され、翌年処刑されたことが彼に残した影響については、本稿では論じていない。

25) 西村伊作『我に益あり・西村伊作自伝』（紀元社、1960年）274-275ページ。

建築家と依頼主・顧客という関係で言えば、どちらも西村伊作であった。まず最初に後者側の、つまりユーザー側の西村があって、次に建築の本を「たくさん読んだ」前者側の建築家西村が現れ、自宅を設計し、そして「住家」に関する本を書くことによって彼以外の「住家」への依頼者・顧客を多く生んだ、ということであろう。実際にどのような本、雑誌を海外から取り寄せ、読んだかは未確認²⁶⁾であるが、「日本人が生活を改善して幸福な家に住む」という目的に資する「世界的に新しい家を作る」情報としての田園都市に関する認識は次のようであった。大正8年9月に初版が出た『楽しき住家』では、

西洋にはガーデンシチームーヴメントなるものが大分前から起つて、人間の幸福な世界のために、都会生活でなく、庭園の中に住む心地の場所を作ると云ふので、此の主義を以つて、田園都市が処々に起りましたが、現代の社会の所謂営利事業としては、あまり利益があり、勘定の合ふものではないのでせう。しかし、或る大きな工場では、職工のために、彼等を楽しく暮さし、健康に生きさして、益々労働にはげみ、他へ職を転じないやうに、政策としてやつて居るのがあるやうです。英国のポートサンライトのレバー石鹼会社や、独逸のエツセンのクルツプ会社などには中々巧く設備した田園都市があるやうです。現代の制度に従ふ限り、工場主が此のやうにするのは、政策とは云ふものゝ悪いことではなく、よいことだと思ひます。

私はさう云ふ、工場などの政策以外に、各自、生活の改善を望む人たちが集つて、小さくとも、美しい村を建てたいと思います（中略）。

私の考への理想の村は（中略）昔風の小さい農村のやうなものではなく、文明の生んだ、現代人の心地よく住むことの出来る村でありたいと思ふのです。²⁷⁾

これに次いで大正10年9月に初版の出た『田園小住家』は、前述のように、「この書

26) 田中修司『西村伊作の楽しき住家——大正デモクラシーの住い』（はる書房、2001年）138ページには「新宮の自邸には1920年代の雑誌『Houses & Gardens』が数多く残されている」とある。

27) 西村伊作『楽しき住家』（警醒社書店、1919年）254-256ページ。なお、西村伊作『現代人の新住家』（文化生活研究会、1919年）257-259ページでも同じ文章が掲載されている。両著は書き出し部分のみ異なるが、それ以外ほぼ同一内容である。

は田園都市に建つ可き小さな住家の設計略図と其の説明を集めたもの」であり、具体的な住宅の設計例を33、そして内装および配置例を8、計41項目が列記している。そして田園都市に関する説明としては、次のようにある。すなわち、

田園都市と云ふよりも、ガーデンシティーと云ふ方が其の意味を明らかにしますが、そのガーデンシティーは自然と親しむ文明人の生活と云ふことと、健康と便利と親しみある社交とを、民衆的に享樂し得るやうに、文化的、人道的の考から起つたものと見てよいと思ひます。

今迄に出来た外国の田園の都市は、或は工場の社会政策のため、或は土地建物経営者が営利のために、ガーデンシティーの名を用ひたものもあるでせうが、それにしても民衆の文化的幸福を思はせるものであるやうです。

家と家とが密接して居らず、一つが一つの独立した家屋を有ち、十分の光線と空気とを受入れ、周囲に樹木ある美しい庭園を有し、隣家と平和な交際をたもち、簡素な生活をする云ふ村落の有する自然の恵みを十分に得られ、而も水道とか瓦斯、電気、または日用品の便利な供給などに於て都市に譲らぬ幸福を得られる、さう云ふ理想に依つて田園都市なるものが作らる可きものと思ひます。

田園都市として特別の設備をしたところでなくても、田園都市の理想を有つて五軒か十軒の家を建てて美しい一部落を作ることが出来るでせう。また、一部落を作らなくても、郊外又は市内でも家のまばらな土地に、田園都市のための家を建てるならば、その家は人間の自然な生活のために考へて設計したものですから、必ず住居として成効するでせう。

此の書の各種の家は元來田園都市にと云つて設計したものでなく、普通の郊外住家なのですが、これ丈け家の設計を集めて見ると、田園都市に斯ふ云ふ風の家計りを建てたなら、將來の日本のガーデンシティーとして適當だらうと云ふ考へが起つたのです。²⁸⁾

前節までのハワード、アンウィンらによる説明と比較すると、この西村は「隣家が密着して」いる建築例があることを見逃している点、また成功例として企業における

28) 西村伊作『田園小住家』序1-4ページ。

労務政策の次元のみが語られている点は残念であったが、「自然と親しむ文明人の生活と云ふことと、健康と便利と親しみある社交とを、民衆的に享樂し得るやうに、文化的、人道的の考から起つたもの」としての田園都市を参考例にして人々の「生活の改善」を図ろうとしていたのであり、その限りではハワード、アンウィンらの改革的側面において連続していたと言えよう。西村はアンウィンらの〈客間ではなく居間を中心とした住宅の設計思想の提案〉と同様な主張を、「居間、リビングルームは最も主要な部屋ですから、南向きの、日当りのよい、快活な、窓の大きな室にす可きものでせう」²⁹⁾と提起していたのである。この点は彼の『楽しき住家』や『田園小住家』が出版された1920年前後の日本の多くの建築家³⁰⁾には見られないユーザーの視点が彼には当初から濃厚にあったこと、つまり前述の通りまずもって彼は建築の顧客側の人物であったことが関係していたように思われる。

他方、彼はその田園都市と同水準の「住家」を自分で設計し、建築し、居住する〈余裕のある〉人を、彼の「住宅建築の本」の読者層に想定していたのであり、その限りにおいて「最初の田園都市」が「現在の賃金のなかから支払うことが出来るような家賃」を支払う労働者を対象としていたのとは不連続性を示している。『楽しき住家』では「家を建てたいと考へる位の人であつたならばどこか心に余裕があつて、自覚して居なくても、どこからか幾分の金が出て來るところの人に違ひありません」(17-18ページ)と人々を励まし、また『田園小住家』では「金のかゝつた家を自慢するよりは金は少して善く出来たのを誇る方が値打があることです」と、「簡単で不足のない家」(64ページ)の建築を人々に推奨していた。

見方を変えれば、西村伊作は〈構想のもともとの意図〉は比較的良く理解していて、それだからこそ田園都市の実現ではなくて、そのアイデアを自分自身の思想の実現のために一部利用することを考えていた、と言えるのではないか。そのような一部利用の態度が家を束ねてグループとしてみる発想、つまり「田園都市の理想を有つて五軒か十軒の家を建てて美しい一部落を作ることが出来るでせう」という村作りを彼に語らせることにもなったのではないか。

こうした西村伊作に対して、明治40年の内務省地方局有志による田園都市理解、大

29) 西村伊作『楽しき住家』56ページ。

30) 『中央美術』第6巻第5号(1920年5月)「住宅研究」、また『住宅』『田園住宅号』(1920年6月)参照。

正7年に渋沢栄一らによって設立された田園都市株式会社におけるそれはどうであったのだろうか。最後にその点に触れたいと思う。

5. おわりに

1988年9月23日号『週刊ポスト』「続ミカドの神話・土地の神話」連載第34回目において、猪瀬直樹は「内務省経由で日本に入ってきた田園都市の理論は、“発明者” ハワードではなく土木技術者セネットのものだった」³¹⁾という趣旨の記事を書いていた。1980年に内務省地方局有志編纂『田園都市』（明治40年）の翻刻版が講談社学術文庫の一冊として香山健一による序文と解説付きで『田園都市と日本人』との新しいタイトルにて出版された時、その香山健一の序文がまずもってハワードの名を挙げ、「また、1905年（明治38年）にはA・R・センネット（A. R. Sennett）の『田園都市の理論と実際』（*Garden Cities in Theory and Practice*）も出版されている」³²⁾と並列的に紹介しているのとは趣を異にしている。

猪瀬はその記事のなかで、「日露戦争で国庫がカラになったとき、もはや自力更生しか残されていない。内務省エリートは、貨幣経済の浸透で崩れかけていた農村の共同体に、新しい再建理念を持ち込もうとした（中略）。こうして“自治”を模索している折、セネットの『田園都市——その理論と実践』が眼にとまったのだ。「内務省地方局有志編」と銘打たれた『田園都市』という本は、彼らの情熱と混乱をそのままに具現していた。『田園都市』でも、『花園都市』でもよかった。いや、『都市』でなく『農村』でよかった」³³⁾と書いたが、「内務省経由で日本に入ってきた田園都市の理論は、“発明者” ハワードではなく土木技術者セネットのものだった」との論点は、本稿冒頭で引用した渡辺俊一「日本的田園都市論の研究（2）：内務省地方局有志（編）『田園都市』（明治40年）をめぐって」——1978年に発表された論文だったので、猪瀬の記事の10年前になる——において既に論じられていたものである。

渡辺論文にはこうある。すなわち、「本書の内容は2重の意味で『田園都市』という題名と相違している。第1に、本書は田園都市論の書ではなく、その名を借りた地方

31) 『週刊ポスト』（小学館）1988年9月30日号、152ページ。

32) 内務省地方局有志編『田園都市と日本人』（講談社学術文庫、1980年）3ページ。

33) 『週刊ポスト』1988年9月23日号、134ページ。

対策・民衆敬化の書である（中略）。第2に、その田園都市論もハワードの概念ではなく、セネット等の曖昧な概念に基いている（後略）。³⁴⁾そして、結論的には「そもそも田園都市論の本質的理解のためには、単に同論の内容自体を理解することにとどまらず、さらに歩を進めて、同論の社会的・歴史的背景を解明し、彼我的背景上の相違をも明確に認識することが必要である。これによってはじめて、田園都市論のわが国への適用可能性（または不可能性）について有力な示唆が得られるはずである」³⁵⁾と記されている。この点でさらに「ハワードの『明日の田園都市』はいかに伝来したか。（これとの関連では、横井時敬らの著作の系譜解明が必要になるかもしれない）」³⁶⁾と。

連続と不連続という観点では、不連続の側面が圧倒的だったということになるのだろう。そして明らかなことは、不連続にさせた原因とは、猪瀬も認識していた通り、内務官僚の関心が専ら「崩れかけていた農村の共同体に、新しい再建理念を持ち込もうとした」、その「地方改良運動」³⁷⁾に傾いていたためであった。

次に渋谷栄一らが設立した田園都市株式会社について見ると、同じく1988年9月30日号『週刊ポスト』「続ミカドの神話・土地の神話」連載第35回目において、猪瀬直樹は「田園調布をつくった渋谷栄一・秀雄父子は、ハワードをどう理解していたのだろうか」³⁸⁾と書き出しているが、その点への直接の答えは当該記事のなかには見当たらないように思う。『渋谷栄一伝記資料』によれば、渋谷が「私は又現に居住地として、欧米の所謂ガーデン・シティの式を日本に実現させやうと考へて居るが、殊に東京附近に田園的居住地の現はるゝことは、甚だ必要であると信ずる」³⁹⁾と述べ、そして「欧米の所謂ガーデン・シティの式」ということに関しては、「一体事務所と住宅とが一つ場所と云ふ事は甚だ不自然だと思ふのである（中略）。何うしても事務所と住宅とは截然

34) 渡辺俊一「日本的田園都市論の研究（2）：内務省地方局有志（編）『田園都市』（明治40年）をめぐって」、『都市計画』別冊1978年、Vol. 13、284ページ。

35) 同書、286ページ。なお、東京市政調査会編『イギリスの田園都市』（1926年）ではその第三章で「ハワード氏の思想的背景」が議論されている。

36) 同書、287ページ。なお、本稿でハワードを理解するために依拠したG. Montagu Harris, M. A. “The Garden City Movement, with a Preface by Ebenezer Howard”は慶應義塾大学図書館がその原本を所蔵しており、昭和4年波多野元武氏から寄贈された旨が記されている。波多野氏は森村財閥に属する人物のように思われる。

37) 宮地正人『日露戦後政治史の研究』（東京大学出版会、1973年）第1章「地方改良運動の論理と展開」参照。

38) 『週刊ポスト』1988年9月30日号、152ページ。

39) 渋谷青淵記念財団竜門社編纂『渋谷栄一伝記資料』第53巻（昭和39年）356ページ。

と別にしてしまはねばならない事になる、すると今の東京の有様では所詮斯う云ふ贅沢な事は出来ない、私が田園都市の建設を思ひ立つたのは是からである」⁴⁰⁾とも述べていた。渋沢はハワードの主張との間で「町なかと田舎の有利さを結び合わせること」への意欲という点では連続していても、〈都市のなかで労働者の労働と衣食住のすべてが完結するユートピア計画の側面〉、または後のわが国における首都圏整備法（昭和31年）における「近郊地帯」（緑地帯）⁴¹⁾の発想の元をなす「実際に建築されないままに残る帯状の土地によって常にその周囲が取り巻かれる」という田園都市の側面については共感するところがなかったのではないか。

渡辺俊一は「日本的田園都市論の研究（1）：田園都市株式会社（1918-1928）の場合」において、本稿冒頭でも引用したように、田園都市株式会社が「開発したのは、ハワード流の田園都市ではなかった」と述べていた。さらに続けて渡辺は「イギリス田園都市は、①形態的独立性、②機能的自己完結性、③土地公有制を特色とするものであるが、わが3地区（洗足地区、大岡山地区、多摩川台地区）は、合体的にも個別的にも、これらの要件を満たしていない」⁴²⁾と指摘していた。

そしてまた福島富士子「田園都市株式会社の田園郊外住宅地——戦前の郊外住宅地開発」は、当初公益性を考慮していた田園都市株式会社は「居住対象者を中流階級に絞った事で、開発計画の目的は田園都市論とは根本的に異なった」⁴³⁾と結論付けている。田園都市の住民として誰が想定されていたのかというポイントであり、この点は西村伊作のケースと共通しているように思われる。

以上で本稿は冒頭で述べたように〈別種の事柄を同じ名称田園都市のもとで受容し続け、今日まで至っているように思われる〉事態に関しては、多少とも瞥見出来たように思えるが、しかしこれでイギリスと日本との間での田園都市思想の〈連続と不連続〉の意味を明らかにすることが出来たわけではない。そこにどんな意味があるかを問うためには、統治と自治の関係のなかで、自治の立場に立った営みが行なわれてい

40) 同書、370ページ。

41) 中沢誠一郎「首都圏整備法の展開とその基盤」、『都市問題』第47巻第12号、1956年、38-44ページ。「戦後土地政策の展開」、『土地住宅問題』127号、1985年、15-27ページなど参照。

42) 渡辺俊一「日本的田園都市論の研究（1）：田園都市株式会社（1918-1928）の場合」、『都市計画』別冊1977年、Vol. 12、155ページ。

43) 福島富士子「田園都市株式会社の田園郊外住宅地——戦前の郊外住宅地開発」、『渋沢研究』第6号、1993年、76ページ。

るか否かを見極める観点が重要だろう。たしかに渋沢栄一が目指したのは「職場を含む田園都市とは異なって、住宅地を中心とした計画」⁴⁴⁾たる田園郊外 (garden suburb) だったと言ふべきだとしても、渋沢が人々の住環境の改善のために尽力した、その社会公共事業への係わり方に対して、「田園都市株式会社の田園郊外住宅地」の一つたる東京都大田区田園調布の自治会「社団法人田園調布会」が敬意を表し、現在でもその住環境に関して自治的な活動を積極的に展開している点は注目すべきだろう⁴⁵⁾。この「社団法人田園調布会」に見られる、住環境に関して〈その内部にあって自ら改革しようとする〉自治的な問題解決の努力は、E・ハワードに見られた種類のそれであり、他方明治40年に『田園都市』を出版した内務官僚による地方改良運動では、奨励された自治は政府の方針に従属するものであって、自治にして自治にあらざるものであった。

本稿では最後にウィリアム・モリスの言葉を引用したいと思う。これは「今日のアーツ&クラフツ」という題で1889年にエディンバラで行なわれた演説の一節であり、醜い産業文明を〈その内部にあって自ら改革しようとする〉芸術家の声、アーツ&クラフツ運動そして田園都市運動の背後からも聞こえて来るその声だと思う。すなわち、

思い切って言おう、現世紀のこの後半部分の精神とは実り多き不満ないしは反乱、すなわち希望のそれだと。そして、その反乱においてわれわれ芸術家はその一部をなしており、かつわれわれは少数派に過ぎず、現にあるが如き少数派であって、往年の揺るがぬ力量の芸術家たちと比較すれば単なるアマチュアに過ぎないけれども、それでもなおわれわれは富の獲得に向かって進むなかで、つまりわれわれの道具の活用に向かって進むなかで、ある種有効な存在なのである。

というのは、多くの人々が一時しのぎに明け暮れる時代の醜く実り少き労苦のなかで忘れてしまっていること、すなわち幸福になることは可能であること、労

44) 東秀紀・風見正三・橘裕子・村上暁信『「明日の田園都市」への誘い』(彰国社, 2001年) 66ページ。

45) 『郷土誌・田園調布』(田園調布会, 2000年) 60ページ下段など、また福島富士子「田園都市の生活施設整備過程と田園都市会による環境改善活動」, 『渋沢研究』第12号 (1999年) を参照。なお、田園調布会の会報『いちよう』(第139号, 平成21年10月30日) に「わが街のモデルはサンフランシスコだった!」(吉谷和子・広報副委員長) が載っている。渋沢秀雄が思い描いた理想の住宅地は、レッチワース訪問後に立ち寄ったサンフランシスコ郊外のセント・フランシス・ウッドであったことが紹介されている。

働は喜びであり得ること、そうしたことをわれわれは、少なくとも、忘れたことはないのである。否、もし労働が正しく指し示されているならば、つまり賢く健やかな人々が遂行される様を目撃したいと望む、そうした諸機能の遂行に向けて労働が指し示されているならば、換言すれば、もし相互援助が労働の基本原理ならば、喜びの本質は労働のなかにあるのだ。

さて、芸術家として、世界に対して、われわれのエネルギーの楽しみを伴う行使が生活の目的であり、幸福の源であることを示すこと、そしてそうすることで、近代生活の不満が実り多き生活の場に至るためにはどの道を辿らねばならないかを指し示すこと、それがわれわれの仕事である以上、われわれはわれわれの責任を鋭く自覚するべきだと私には思える。⁴⁶⁾

この、労働を肯定するその先に希望を、そして美を見出そうとするモリスに対応する日本の思想家——そのカテゴリーに例えば西村伊作は入れて考えることが出来るのだろうか⁴⁷⁾。産業文明の光と影の両方の側面を考えていた近代日本人に着目することによって、一つの思想の歴史を書くことに私は興味を感じているが、本稿はそこに踏み込む手前で止まっている。

46) William Morris, *The Arts and Crafts of Today*, “*The Collected Works of William Morris*”, Vol. 22, Russell & Russell, 1966, pp. 372-373.

47) デザイン史フォーラム編（藤田治彦責任編集）『アーツ・アンド・クラフツと日本』（思文閣出版、2004年）参照。なお同書にて西村伊作を扱った論文として水沢勉『『自邸』の変容——西村伊作による『生活』の『芸術化』の試み』（155-166ページ）、植野比佐見「文化学院の『アーツ・アンド・クラフツ』運動」（260-270ページ）を読むことが出来る。水沢勉、植野比佐見の両氏の編集になるカタログ『『生活』を「芸術」として——西村伊作の世界』（NHK きんきメディアプラン、2002年）も参照されたい。さらに藤田治彦編『芸術と福祉』（大阪大学出版会、2009年）はジョン・ラスキン、ウィリム・モリスらから、ガンジー、タゴールそして柳宗悦、武者小路実篤らまでの世界的視野のもと、広義の福祉問題への芸術家たちの対応を問うた業績として貴重な論文集である。